

2009年9月13日 主日礼拝メッセージ

聖書箇所：サムエル記第一 10章 14～27節

説教題：隠れることのないキリスト

はじめに

サムエルが活躍していたのは、今からおおよそ三千年前の時代になります。当時、イスラエルは神御自身が国を治めておられました。と言っても、もちろん神が直接治めるということではなく、神とイスラエルの間に祭司、あるいは「さばきつかさ」と呼ばれる者が神の代理として立って国を指導していた。その役割を担っていたのがサムエルでした。

祭司の下には、また地方ごとに長老と呼ばれる人たちがいて、それぞれの地域を治めています。何か必要なことが起きれば、長老たちが集まり話し合いをして決めます。祭司は霊的な指導を行い、長老たちは実際の政治運営をする。お互いに役割を分担しながら、人々を導いてきました。しかし、サムエルの時代になって、「このままではいけない。自分たちも他の国のように王さまを立てるべきでないのか」という強い声が長老たちの間から上がってきました。

1 神とイスラエル

17節以降の所は、まさにその王さまが選ばれていく場面です。長老たちの強い願いがかなえられていきます。サウルが王さまに選ばれ、人々は「王さま。ばんざい」と言って喜びます。けれども、手放して喜んでいられる場面でしょうか。

サムエルは、王さまを選ぶにあたって、こう言っています。18、19節。「イスラエルの神、主はこう仰せられる。『わたしはイスラエルをエジプトから連れ上り、あなたがたを、

エジプトの手と、あなたがたをしいたげていたすべての王国の手から、救い出した。』とここで、あなたがたはきょう、すべてのわざわいと苦しみからあなた方を救ってください、あなたがたの神を退けて、『いや、私たちの上に王を立ててください』と言った。」

時間的なことを言えば、エジプト脱出の出来事は、サムエルの時代から見れば、おおよそ四百年前の出来事です。神は、「四百年前のことをもう忘れてしまったのか」と問いかけています。今の時代に生きる私たちの感覚では、四百年という時間はるか大昔のことに感じます。「そんな大昔のこと、覚えていません」と私たちは言いたくなるでしょう。

ところが、イスラエルの敵であったペリシテ人たちはどうだったか。自分たちの民族の出来事でもない、敵の側の歴史であったのにもかかわらず、鮮明に覚えていました。あのイスラエルには、エジプトの王さまもかなわなかった神がついている。自分たちは、イスラエルの神と戦っても勝ち目がないと、ぶるぶると震え上がってしまった。そういうことが4章に書かれています。

ペリシテ人たちでさえ、四百年前のことを昨日のこのように覚えているのですから、ましてイスラエルは忘れるはずがない。忘れるはずがないのに、まるで忘れたかのように神を退けていきます。人間の王さまでなければ救われなれないと思込んでいます。

神が指摘しているように、これは大変な罪です。ところが、神はイスラエルにサウルという一人の王さまを与えます。長老たちの願いを聞き入れていきます。不思議に思います。

そのことはまた後で触れることにして、イスラエルに最初の王さまがどのような順序で選ばれていったのか。整理していきます。

2 サウルが取り分けられるまでの順序

例えば、この教会で役員を選ぶ手順を考えます。役員候補指名委員会を開きます。そこで候補者を挙げ、候補者を絞っていく。次に役員会の場で候補者の承認がされます。そして最後に、信徒総会という決議の場で信任投票が行われ、役員が選ばれていきます。これが順序です。

では、サウルが王さまに選ばれる手順はどうであったか。前回の箇所に戻りますが、サムエルはサウルと二人っきりの場面を作ります。ほかの人は誰もいません。そこでサムエルはサウルの頭に油を注ぎます。昔は、王さまの就任式では儀式として頭に油を注いだと言われます。いきなり王さまの就任式を行ったということになります。加えてもう一つのことが起きました。そのすぐ後ですが、神はサウルに主の霊を注ぎ、サウルを新しい人に変え、いきなり預言を始めていく。サウルをよく知っていた人たちは大いにとまどいました。サウルが王さまに選ばれたことをだれも知らされていません。サウルは、おじさんにいったい何があったのだと尋ねられるのですが、それでもサウルは黙っていた。それがまず最初に起きたことでした。

その次に起きたこと。人々がミツパという場所に呼ばれ、その場でくじが引かれていきます。何度も繰り返してくじを引いて、徐々に人数が絞られ、最後にサウルが残る。そうやって、サウルが初代の王さまに選ばれる。そこで初めて、公の場でサウルが王さまとして認められます。

サウルが選ばれていく順番を見ました。私たちが知っている常識を比べてみてください。順序が逆です。確かにくじを引いてはいますが、最初から誰が王さまになるのかが決まっている。こういうのを世間では八百長と言います。「そうかサムエルは八百長をしていたのか。くじに仕掛けがしてあって、サウルが選ばれるように最初から細工していたのだ。」もちろん、そんなことはありません。細工などしていません。それなのに、規定どおりにサウルが選ばれる。どういうことでしょうか。人間業ではありません。神がしているのでなければこうなることはありません。

そうしますと、あえて順番が逆になっているのはなぜか、その理由がわかります。サウルが確かに神によって選ばれ、神によってイスラエルに与えられた王さまである。そのことを疑うことができないにはっきりと示すために、ということですよ。

サウルが選ばれたとき、人々が感じていた謎が解けました。どうしてあのサウルが一夜にして変わったのか。あの若者が、突然預言するようになったのはなぜか。そうか、神がサウルを王として選んだためであった。このようにして、ひとびとは神のみわざを認めていきます。

3 その結果

しかし続く 26,27 節を見ると、全員がサウルを受け入れたわけではなかったことが書かれています。「神に心を動かされた勇者は、サウルについていった。しかし、よこしまな者たちは、「この者がどうしてわれわれを救えよう」と言って軽蔑した。」

サウルが選ばれたとき、彼は荷物の後ろに隠れていました。おどおどした姿からは、どう見てもリーダーにふさわしいとは思えない。サウルのことを疑うのにはそれなりの理由があるといえ言える。

しかし、たとえ弱々しく見えたとしても、たとえリーダーの素質に欠けているように見えたとしても、神がサウルを与えたという事実は、先ほど見たとおりに疑いようがありません。理由はどうであれ、彼らがサウルを軽蔑したということは、神が与えた者を拒否したことになります。

人間というものほどこまでも勝手な生き物です。戦争のような大きな緊張が迫ってくる時には、「王さまを与えてくれ。絶対に王さまがいなければならない」と叫びます。そして首尾良く王さまが与えられますと今度は、「こんな頼りない王さまはいやだ。別の王さまにしてくれ」と叫び始める。小さな子どもならいざ知らず、大の大人がこんなことを言ってはばからない。笑い事ではありません。私たちがしていることは、所詮こんなレベルではないかと思うのです。

4 隠れることのない完全な王

(1) 願いを聞かれる神

長老たちは神を退けるという罪を犯してまで王さまを与えてくれと願いました。しかし、神は不思議なことに、彼らの願いを拒まず、むしろ積極的にサウルという王さまを与えます。

“そうか、神さまは私たちのどんな願いでも聞いて下さる。”もし本当にそうだというのなら、神に祈るといのは、わがままな子どものように駄々をこねたらお菓子を買ってもらえるというレベルの話になります。

もちろん、そんなはずはありません。神があえて、長老たちの罪の願いを聞かれたのには、きちんとした理由と目的があつてのことです。どういうことか。確かにサウルが王として立てられていく。肩一つ高いすばらしい王さまに見えました。でも、どれほどすばらしく見えた王であっても彼は結局倒れ、失敗し、そして死んでいくのです。そうやって、やがてイスラエルは、自分たちの願ったことの実態を思い知ることになるのです。神はあらかじめ警告していました。「その日になって、あなたがたは、自分たちの選んだ王ゆえに助け手を求めて叫ぶことになる」

おわかりでしょうか。どうして、わざわざ神がサウルを王として与えていくのか。私たちは徹底的に心がたくなのです。痛い目に会わないと気がつかない。自分たちが願ったことがどれほど大変な罪であつたのか、それに気がつくように、神はあえて王さまを与えるのです。神はひどいお方だと思うのでしょうか。いいえ。だって、神はきちんと警告していたのです。それでも長老たちは願いを取り下げようとしなかった。自分で願った結果、自分で苦しみを招いているのです。すべては、人間の側の責任になります。

イスラエルはこの後、神が警告したとおりの結果になっていきます。そこで初めてイスラエルは、神のみこころに気がつき始めます。人間の王は自分たちを救うことができない。神御自身が王となられたとき、初めて自分たちは救われていくのだ。

神があえて罪の願いを聞かれる。私たちが神のご計画を受け入れていく準備のためにあえてそうなさる。どこまでも神は私たちを救いたいと願っているのです。私たちがどんな罪なことを願ったとしても、それを益に変

えようとされるのです。

(2) やがて来られる真の王

やがて、神は御自身の計画を明らかにされます。サウルの後にダビデがイスラエルの王となったときのことですが、預言者ナタンはダビデに告げます。「わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」(IIサムエル記7章12,13節)ひとこと言えば、ダビデの子孫から本当のそして完全な王が現れるということです。そればかりではない。ナタンは神のことばとして次のように続けます。「わたしは彼にとって父となり、彼はわたしにとって子となる。もし彼が罪を犯すときは、わたしは人の杖、人の子のむちをもって彼を懲らしめる。」

(3) 「ユダヤ人の王ナザレ人イエス」

もうおわかりだと思いますが、ダビデの子孫として来られる真のイスラエルの王とは、イエス・キリストを指します。

サウルは王になるとき、恐れて荷物の間に隠れました。しかし、キリストは違います。誰の目にもはっきりと見えるように、十字架におつきになります。ナタンが預言しとおりに、キリストは懲らしめを受けて行かれました。その十字架には、「ユダヤ人の王ナザレ人イエス」(ヨハネ19:19)とはっきりと書かれています。

サムエルはかつて長老たちに警告しました。人間の王は、あなたがたを上から支配し、徹底的に取りあげ、苦しめることになる。

でもこの方はどうですか。私たちから何か

を取りあげましたか。むしろ、ご自分のいのちを私たちに与えてくださいました。私たちを苦しい労働や兵役に駆り出すお方ですか。むしろ、疲れている者はわたしのところに来て休みなさいと招いてくださる方です。

私たちは救い主イエス・キリストを、私たちの王と信じて歩んでおります。けれども、どうでしょうか。私たちのうちにも、神を退け、人間に頼ろうとする罪の思いがなかったかどうか、今朝問われているように思います。イザヤ2章22節にこうあります。「鼻で息する人間をたよりにするな。そんな者に、何の値うちがあるか。」

「鼻で息する人間」この場面では、サウルにあたります。そして私たちもまた、あの人この人にいつのまにか強い期待を寄せてしまうことがあります。しかし結局鼻で息をする人間に過ぎません。どんなにすばらしい能力があっても、どんなに高い地位にあっても、いつか期待は裏切られていきます。裏切られれば当然失望し、怒りが湧きます。もし心の中に、誰かに対する怒りを覚えているのなら、もしかするとそれは期待が裏切られたということが原因なのかもしれない。そして結局、神ではなく人に頼っていたということではないか。

私たちは何に期待を寄せていたのでしょうか。もしキリストが十字架で死んでそこで終わったのなら、私たちはキリストに裏切られたことになります。しかし、この方は墓からよみがえりました。死からよみがえられたお方なので、絶対に私たちに裏切ることはない。そのことを覚えてたいと思います。

私たちの救いは、王としてこられた主御自身にしかないことを、もう一度確認したいと思います。